

生涯にわたる読書習慣の 形成を目指して

学校教育課通信

令和6年3月8日 第196号

編集・発行：県南教育事務所 笠原聡美

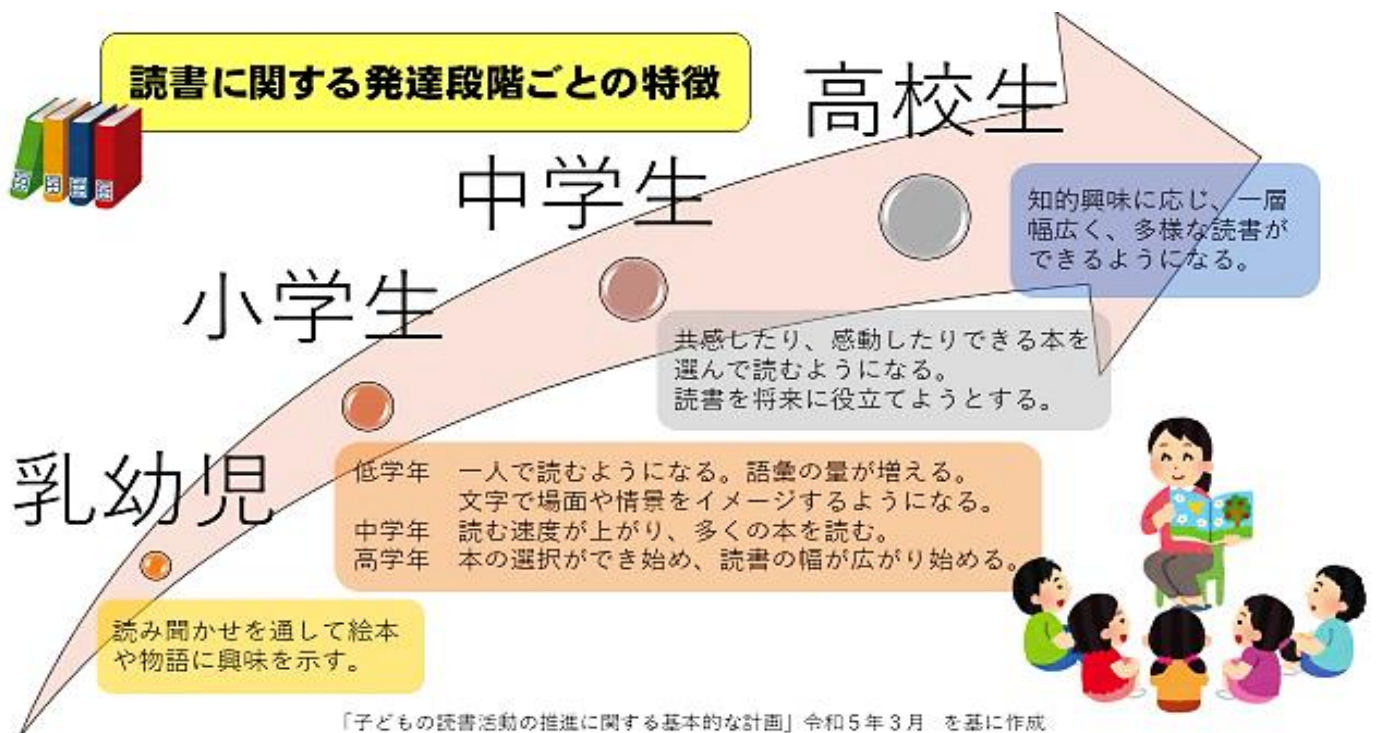
発達段階に応じた読書の推進を

読書活動は言葉を学ぶ、感性を磨く、知識を得る、創造力を豊かにするなど、数多くの力を養います。しかし、読書離れが進んでいるのが現状です。国立青少年教育振興機構による「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究」（令和3年）では、読書活動の実態や子どもの頃の読書活動が与える影響について次のような結果が示されています。

【調査結果のポイント】

- ① 子どもの頃の読書量が多い人は、意識・非認知能力と認知機能が高い傾向にある。
- ② 興味・関心にあわせた読書経験が多い人ほど、小中高を通じた読書量が多い傾向にある。
- ③ 年代に関係なく、本（紙媒体）を読まない人が増えている。（平成25年と平成30年を比較して）
- ④ 一方で、スマートフォンやタブレットなどのスマートデバイスを使った読書は増えている。
- ⑤ 読書のツールに関係なく、読書している人はしていない人よりも意識・非認知能力が高い傾向があるが、本（紙媒体）で読書している人の意識・非認知能力は最も高い傾向がある。

読書ツールに変化はありますが、読書活動は、意識・非認知能力に望ましい影響を与えていることがわかります。報道でもありましたとおり、福島県内の高校生のうち「1か月に1冊も本を読まない」生徒の割合は男子65.4%、女子57.0%であり、不読率の改善が求められているところです。大人になってから再び読書に親しみ、生涯にわたる読書習慣を形成するためには、子どもの頃に読書に親しんでおくことが重要です。それぞれの発達段階に応じた読書を推進していきましょう。



<令和5年度の読書調査結果及び考察>

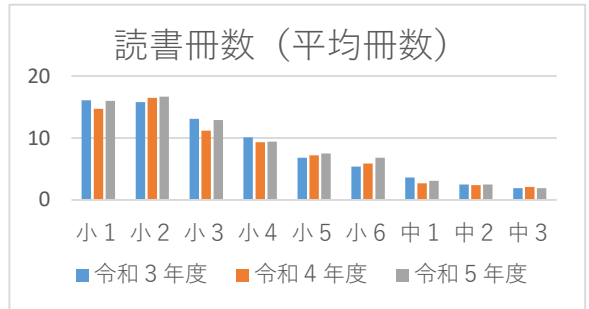
令和5年11月に実施した「読書に関する調査」の県南域内の調査結果の一部です。調査にご協力いただき誠にありがとうございました。今回の結果を各学校での読書活動の推進、充実に役立ててください。

○ 対象人数 域内全小・中学校全学年（1学級抽出又は全学級）

計6861人（域内全小・中学校在籍者の65.4%）

1 平均読書冊数について（単位：冊）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
令和3年度	16	16	13	10	6.8	5.4	3.6	2.5	1.9
令和4年度	15	17	11	9.3	7.2	5.9	2.7	2.4	2.1
令和5年度	16	17	13	9.4	7.5	6.8	3.1	2.5	1.9

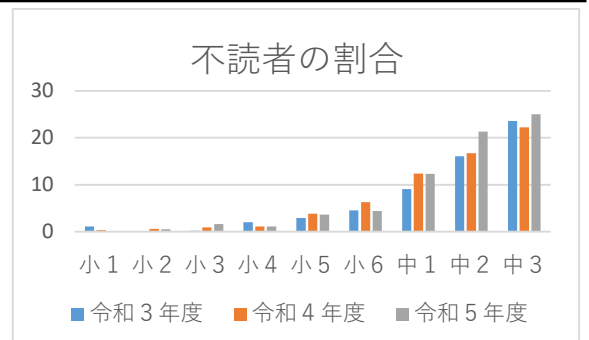


- 小学1～3年生の読書冊数は10冊以上であり、読書に親しんでいることが分かります。小学5・6年生においては、この3年間を通して読書冊数が微増しています。
- 中学生の読書量については、大幅な増減はありません。引き続き学校図書館の環境整備や多様な読書活動による読書の推進が求められます。

2 【不読者（1か月に1冊も読まなかった児童生徒）の割合】

（単位：％）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
令和3年度	1.1	0.1	0.2	2	2.9	4.5	9.1	16	24
令和4年度	0.3	0.6	0.9	1.1	3.8	6.3	12	17	22
令和5年度	0.1	0.5	1.6	1.1	3.6	4.4	12	21	25



- 小学1～4年生においては不読者の割合が大変少ない状況にあります。小学校全体としても不読率1.9%であり、概ね読書に親しんでいるといえます。
- 中学校は不読者の割合が増加傾向にあります。生徒の身近にある電子メディアが影響していると考えられます。メディアとの付き合い方を見直しながら、読書に親しむ機会を増やしていく必要があります。

「読書好き」を育てるためのヒント

〈読書量の多さにつながる経験〉

- ① 本を持ち歩く
- ② 地域の図書館で本を借りる
- ③ 同じ本を繰り返し読む
- ④ ジャンルを問わず読む
- ⑤ 本文以外の部分も読む（前書き、目次、解説など）
- ⑥ 図書委員、子ども図書、読書コンシェルジュの活動
- ⑦ 絵本を読む



「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究」（令和3年3月） 国立青少年教育振興機構 を基に作成



様々な分野で活躍している著名人がおすすめの1冊を紹介しています。子どもたちの興味関心を高め、ジャンルを問わず読むきっかけとしてぜひご活用ください！